

## 「コロナ禍で続くペットの飼育放棄」

この新聞記事の見出しを見た時、ぼくは胸が締め付けられるような気持ちになりました。記事の内容は、悲しい現実でした。新型コロナウイルスの流行を防止するため多くの人々が外出を制限される中、「犬」や「猫」のペットを飼う人が、急増したそうです。けれど、今やそのペット達が飼育放棄されているのです。飼えなくなった理由は、「お金がかかる」「テレワークが終わり、面倒をみられない」など人間側のものばかり。さらに悪いことに、新しい飼い主を見つけない譲渡会もコロナ禍でなかなか開けず、その多くが殺処分されているという内容でした。その数字は令和二年度で約三万三千匹にのぼります。

ぼくは、自分の家の犬「ムサシ」のことを思い出しました。ムサシは、今年の三月九日に亡くなりました。年は十七歳。人間で言えば、八十歳以上のかかりのおじいちゃん犬です。ぼくは一人っ子なので、ムサシは兄弟のような大切な存在でした。ぼくと父は、夕方になるとムサシと散歩に行きました。けれどここ数年ムサシは、電柱にぶつかりそうになったり、呼んでも気がつかなくなったりすることが増えました。父に理由を尋ねると、「ムサシも年寄りだからな。耳や目がだんだん利かなくなってきたんだよ」と答えてくれたことを覚えています。そんなムサシが、昨年十二月に足がうまく動かなくなり、寝たきりのような状態になってしまいました。ぼくたち家族は、全員でムサシの世話をしました。寝るところを裏の小屋から家の中に移動して、毎晩湯たんぽをおいて温めました。けれど、三月九日の朝に、ムサシは固くなって亡くなっていました。母から朝そのことを聞いてぼくはびっくりして、涙も出ませんでした。ようやく泣くことが出来たのは、その日の夕方です。

そんな経験から、ぼくは動物を最期まで飼うことの重みを強く感じました。動物を飼うということは、その動物の生きる日々すべてを、飼い主が預かることだと気づいたのです。それは、決して軽く考えてはいけないことだということも。

これから何か動物を飼おうと思っている人は、どうか飼う前に、楽しいことと同時に、大変なことがあることも想像してみてください。そして、覚悟と愛情を持って、育ててほしいです。そうすれば、動物達も飼い主も両方が幸せになり、殺処分なんていう現実をなくすことができると思います。ぼくは、これからもムサシとの思い出をたくさんの人に伝えていきます。ぼくの弾くピアノに合わせて元気に「ワオーン」と吠えるムサシも、目も耳も不自由になりながら、ぼくがそばに行くとき鼻をクンクンさせて近づいてくる年老いたムサシも両方ぼくは大好きです。そして、最期の日まで一緒にいられる幸せを、一人でも多くの人に知ってもらうことが、悲しい現実を変える助けになると思います。